
ペルージャの青い華

星野すばる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペルージャの青い華

【Nコード】

N2586L

【作者名】

星野すばる

【あらすじ】

男に生まれたかったアユラ姫、姫に拾われた記憶喪失の青年タリク、2人に振り回されっぱなしの近衛兵ラディン。姫をめぐる三角関係？ いやいや、そっちよりむしろ アラビアンナイト風異世界王宮FT

序

漆黒の硬そうな髪。

それが、その青年に対するアユラの第一印象だ。この辺りでは、黒髪は珍しい。大体が日に焼けたような茶髪か、アユラのような金髪で…… もっとも、アユラの純金のごとき輝きも珍しいのだが。

それはそれとして。

（なんだって、こんなところに寝てるんだ？）

ここは、王宮の中庭だ。普通に誰もかれもが出入りできる場所じゃない。なのに、この明らかに余所者の青年が寝ている。

「おい、お前」

アユラは頭のすぐ横にしゃがんで声をかけた。しばらく待っても返答はない。

「というか、起きない。」

「おもしろい」

ニヤリ、とアユラは笑った。

ペルージャ国の王妹アユラは男に生まれたかったと豪語している。黙って立っていれば、この世に2つとない金髪と鮮やかな青い瞳の美少女。「ペルージャの青い華」と、王宮の面々だけでなく、国民からも誇らしく呼ばれている。それが、何の因果か剣を振り回すのが大好きで、片時もじっとしていない。

今日も朝からお付の兵士ラディンの、姫を捜す声が王宮に木霊する。

「呼んでるぞ」

タリクが植え込みに向かって呼びかけると、その茂みから、ピョコンと金色の巻き毛が現れた。

「もうばれたか。なら、急がないとな」

アユラが笑う。

「あとは任せたぞ、タリク」

「面倒なことは、すぐ人に押し付ける」

「当然だ」

じゃあな、とアユラは元気よく手を振り、走り去っていく。その後ろ姿を見送りながら、タリクは「さて」と、己の黒い頭を掻いた。まもなく、声の主が姿を現した。

「タリク！ お前がここにいるということは、姫も近くにいらっしやるか？」

男にしておくにはもったいない優美な顔を瞬時に歪め、ラディンが詰め寄る。

「アユラなら」

「アユラ『姫』！ 呼び捨てにするな！」

何度言ったら分かるんだ、とラディンがタリクに指を突きつけ、咆える。タリクは少し下にあるその青い目を見つめ、鼻を鳴らした。「あいにく、俺はアユラの家来じゃない」

「客人だとても？」

「そこまであつかましくはない」

「よく分かってるじゃないか」

では、と言ってラディンがタリクの脇を通り抜けようとしたそのとき。

「わーっ！」

足を引つ掛けられて、前のめりに転倒する。

「おっと」

タリクが片腕を伸ばしてその体を受け止める。そして、言うには

「お前の顔に傷をつけたら、アユラがうるさい」

「だったら、足など引つ掛けるな！」

「よける、これぐらい」

仮にも訓練を受けた近衛兵、そのくらいの反射神経はあるはずだ。タリクが片方の口角を上げて言う。ラディンの顔が見る間に赤く染まった。

「ゆ……油断しただけだ！」

「戦場でそれは、命取りだぞ？」

「ほお、知ったふうな口だな。記憶が戻ったのか？」

それはめでたいと、ラディンが眉を吊り上げてタリクをにらむ。

その瞬間、タリクが表情を消した。

「いや……」

視線も反らす。

「そういうわけでもなさそうだ」

他人事のようにタリクがつぶやいたそのとき、ラディンが身をひねるようにして拳を突きつけた。

顔面に当たる寸前、タリクは片手でそれを受け止めた。

互いの拳ごしに視線を合わす。互いの目を見据え、そこにあるはずの真実を探る。

「それだけの身のこなし。お前は絶対素人じゃない」

ラディンがそう言えば、タリクも「ああ」とうなずく。

「俺も、そう思う」

「ふざけるな！」

「だったら、いいんだがな。お前がどう思おうと勝手だが、本当に覚えてないんだからしかたない」

「あいかわらず、何も思い出せないのか？」

「ああ」

タリクはラディンの拳を押し戻すようにして放した。ラディンもそのまま拳を納め、視線を外す。ポツリとつぶやいた。

「悪かったな」

タリクは1ヶ月ほど前、王宮の中庭に倒れていたところをアユラに助けられた。1昼夜眠り続けて目を覚ましたとき、自分が何者でどこから来たのか、何1つ覚えていなかった。「タリク」という名前と、おそらくは東のほうから来たことだけ、その数時間後にかろうじて思い出した。

ラディンがおとなしくなったのを見て、タリクがまた片方の口角を上げた。

「しおらしいな。気持ちが悪いぞ」

ラディンが反射的に顔を向ける。その瞬間をうまくねらって、タリクは彼の顎を捕らえた。

「実は俺に惚れてるとか？」

「な……っ」

怒りでラディンの顔が真っ赤になる。

だが

「まああつ！ ラディン様とタリク様が見詰め合っているしやるわ！」

「タリク様ー、そのまま押し倒しちゃってくださいませー！」

女官たちの妙な声援が飛んできて、2人は我に返った。

「バ……バカ、違う！」

ラディンがタリクの手を振りほどき、叫ぶ。タリクはそのまま無

表情に、彼らのやりとりを眺めている。

「お前、アユラを捜してたんじゃなかったか？」

「そうだった！」

タリクに指摘され、ラディンが我に返った。

「今日こそは逃がさないつもりだったのに！ 姫ーっっ！」

ラディンはそのまま騒々しく駆け去った。今度はタリクも邪魔しなかった。

王宮近くの市場にアユラが姿を見せると、皆一斉に気付いて笑顔になった。

「姫様、おはようございます」

「おはよう」

アユラも笑顔で挨拶を返す。子供たちが飛び出してきて、アユラを取り巻いた。

「姫さま、ねえねえ、踊って」

「踊って！」

手を取り、期待に瞳を輝かせる。そんなふうに頼まれては、アユラもイヤとは言えない。

「でも、今日は相手がいないからなあ」

「1人じゃ踊れない？」

「いや、踊れるが、あれは相手がいたほうが映える踊りだから」

「だったら、ラディン様を置いてきちゃいけませんな」

近くの店の親父が熟知り顔で笑う。アユラが口をとがらせた。

「あいつがついてくると、何かとうるさい」

「しかたありませんやな。ラディン様は姫のお守役なんですし」

「守役？ 確かに、口うるさいところは乳母にそっくりだ」

そう言つて、アユラは明るい笑い声を響かせた。周りの者もつられて笑った。

「じゃあ、軽く体動かすか」

アユラは腕を高く上げて体を伸ばすと、辺りを見回した。手頃な棒が視界に入ると、手に取り、重さを確かめる。

「よし。皆、ちょっと離れてろ」

「わーい！」

子供たちが周囲に散る。アユラは棒を構えると、呼吸を整えた。どこからともなく太鼓が鳴る。いや、周囲の店の親父や客が適当

な器や手を叩き、拍子を取っているのだ。

ペルージャの民は元々歌舞音曲に優れている。言葉を覚えるのと同じように、ごく自然に歌を覚え、楽器を弾き、踊る。酒場でも市場でも、ペルージャの民が複数集まれば必ずそこに音が生まれ、踊りが始まると言われている。

老いも若きも、性別、身分の上下も、そこにはない。音の鳴り響く間、すべての者が等しくその楽しみを分かち合う。

アユラが拍子に合わせて踊りだした。

突き、払い、ふりかぶって薙ぎ払う。あるいは頭上高く掲げて、体を一回転。小脇に抱えて片足立ちしたかと思うと、力強く足を踏み鳴らして棒を突き出す。

剣、あるいは槍で舞われるそれは、本来男が2人1組で踊るものだ。1人では、よほど所作の身についた者でなければ迫力に欠ける。だが、アユラが舞うなら、そんなことは問題にならない。技術はともかく、堂々とした舞姿は駆け出しの踊り子などよりよほど勇ましく、美しい。

なにより、見る者を楽しくさせる。アユラが舞えば、いつのまにか周囲に笑顔の人ばかりができている。

今もまた……。

「みーっけーたー」

「うわっ！」

人垣を押し分けて前に出てきた青年 ラディンに気付くと、ア

ユラは瞬時に固まった。

「ひーめーさーまー」

ラディンが怒りの気をまき散らしながらにじり寄る。

「き……今日は早かったな」

アユラが苦笑いしながら後ずさる。

「ええもう、これだけの人ばかりができていれば、一発です」

ラディンが一変してこれ以上ないほどにこやかに笑う。その豹変ぶりもまた恐ろしい。

「そ、そうか……それもそうだな。うん」

アユラがさらに後ずさる。そのとき、1人の子供が飛び出してラ
ディンの足にしがみついた。

「うわっ」

「いまだ！」

他の子供たちもワツと飛び出し、ラディンを押さえにかかる。

「姫さま、いまだよ、にげて！」

「え？ いや、それは……」

「姫さま、にげて！」

子供たちに悪気はない。だから、ラディンも怒るに怒れない。ま
さか蹴散らすわけにもいかず、完全に動きを封じられてしまった。

アユラがク、と喉を鳴らした。

「アッハハハハハ」

そのまま、しゃがみこんで爆笑する。辺りからも笑う声がもれだ
した。

「姫、笑い事じゃないです！」

ラディンが口をとがらせる。

「だって、お前……それ、おもしろすぎ」

腹を抱えて、目に涙まで浮かべている。ラディンの肩がプルプル
と震えだす。

「ひーめーさーまー」

「う……あー、皆、気持ちはとても嬉しい」

ラディンの声音が変わったので、アユラは潮時と察した。

「だけど、ラディンはべつに私を怒りにきたわけじゃない。だから、
放してやってくれ」

「ラディンさま、本当に姫さまのこと怒らないじゃない？」

1人が彼の顔を見上げ、尋ねる。ラディンはその子供を見ると、
柔らかにほほ笑んだ。

「怒らない。約束しよう」

「姫さまと一緒に踊ってくれる？」

「　　は？」

「わー、踊って！」

「ラディンさま、踊って！」

「え、ちよつと……姫、なんでこうなるんですか？」

「さあ？」

アユラにも分らない。肩をすくめ、苦笑してみせる。そうこうするうちに、子供たちは期待を込めてラディンを見つめる。その視線に、ラディンも負けた。

「では、相方を務めさせていただきます」

「うん」

誰かが投げてよこした棒を受け取り、ラディンはアユラに相対した。アユラも応じるように構えをとる。

また、自然と拍子が入る。呼吸を合わせて、2人は舞い始めた。受けて流す、突けば払って切り返す。ラディンの所作はアユラのそれより洗練されていて、1つ1つに無駄がない。アユラよりもよほどこなれている。元々剣を扱い慣れているからだろう。

なにより、2人の呼吸が本当にピッタリと合っている。棒とはいえ、気を抜けば大怪我につながる。だからといって、どちらかが遠慮しているようなそぶりはない。2人とも本気で打ち合っている。それだけ、お互いを信頼しているということだろう。

だからこそ美しい。人の目を惹き付け、心を捕らえて放さない。「はっ！」

アユラが最後に一際力強く振り下ろした棒を、ラディンがピタリと止める。そこで、舞が終わった。

周囲から、ワツ、と歓声が上がる。それを、2人は誇らしく笑って受け止める。

「姫さま、かっこいい！」

「すごい！」

「姫さまー！」

子供たちがアユラに群がる。アユラはその1人1人の頭を順に撫

でてやる。その様子を見て、ラディンは苦笑交じりのため息をついた。

「姫、満足されましたか？」

頃合で声をかける。アユラが顔を振り向け、笑った。

「ああ。今日も皆の笑顔を見て、とても嬉しい」

アユラがそう言つと、周りの民が嬉しそうに笑う。こちらこそ、と誰かが言えば、周りの者もつられて「姫様、ありがとう」と手を振る。

アユラも手を振り返した。

「では、そろそろ帰りましょう」

「うん！」

ラディンの言葉に、アユラは素直にうなずいた。

アユラとラディンが王宮に戻ってきたとき、タリクはまだそこにいた。

「また、寝てる」

アユラが苦笑する。

「落ち着くんじゃないですか。大体、あそこが定位置ですから」

「倒れてた場所だからかな」

「そうなんですか？」

「うん」

中庭……正確にいうなら、王の居間と女たちの住まう後宮とを別つ庭園だ。後宮側でなかったのが救いだらう。そうでなければ、さすがにアユラもかばい切れなかった。

「タリク」

アユラは最初に見つけたときと同じように頭のすぐそばにしゃがみ、声をかけた。しばらくして、タリクが目を開く。アユラの顔を見て、ほんの少し口角を上げた。

「おかえり、アユラ」

「ただいま」

「だから、呼び捨てにするなと言うのに！」

ラディンが咆えたが、アユラとタリクはきっちり無視。

「いつもここに寝てるな。どうしてだ？」

「何か思い出せるかと思ってな」

「思い出せそうか？」

タリクはその質問に肩をすくめることで答えた。

「焦らなくていいぞ。ラディンはうるさいが、私はお前がいたほうが楽しい。本当に、ずっとここに居ていいんだからな」

「そんなことばかり言っていると、ラディンが憤死するぞ」

タリクがチラツと彼を見て、片方の口角を上げる。

「ホラ、にらんでる」

「んー？」

アユラが振り返る。確かに、ラディンの表情はこの上なく陰悪だ。

「ラディン、せっかくの美人が台無しだぞ」

「そう思うなら、こんな顔しなくていいように振舞っていただけますか、姫？」

「イヤ」

アユラがニツコリ笑う。タリクが爆笑し、ラディンはガツクリと肩を落とした。

そのとき、後宮の側から女官が1人飛び出してきた。ラディンがすぐに駆け寄り、その腕を掴んで止める。

「ここより先は王の居間だ。立ち入りならん」

「あ……」

女官は我に返ってラディンを見ると、ほんのりと頬を染めた。

「申し訳ありません」

「早く持ち場へ戻りなさい」

「はい……でも、あの」

女官が目を潤ませてラディンを見つめる。ラディンはイヤな予感を覚えた。

その瞬間

「お助けください、ラディン様！」

女官はワツと鳴き声を上げてラディンの懷に飛び込んだ。やはり、こうきた……ラディンが固まる。

「私、大変なことをしてしまったんです。でも、私が悪いんじゃないんです。なのに誰も話を聞いてくれなくて！」

「そんなこと、急に言われても……」

ラディンが彼女を持て余してオロオロする。そのとき、アユラが2人の間に割って入り、女官をベリツと引き剥がした。

「ひ……姫様っ」

女官があわてて後ろへ下がる。ラディンがホツと一息ついた。

「義姉上のところのシャイアだな。何があつた？」

アユラはこめかみに青筋を立てて、ニツコリと笑っている。

「あの、私……王妃様の大事な櫛を……」

「兄上が贈られた、螺鈿細工のアレか？」

「それです、その櫛です！」

「それをどうしたつて？」

「失くしてしまったんですーっ！」

シャイアはワツと泣き声を上げてアユラの横をすり抜け、またラディンにしがみついた。瞬時に、アユラが引き剥がす。

「失くしたものは仕方ないな。義姉上に正直に話して謝るといい」
声に、棘が増す。

「それができれば、こんなふうに泣いてません！」

「泣いて櫛が出てくるんなら、私も一緒に泣いてやる。さあ、どうする？」

「姫、ちよつとお言葉がきついのでは」

「なら、お前が相手してやるんだな」

「わー、行かないでください！」

アユラが去りかけたので、ラディンはあわててその衣を掴んだ。

「で？」

木陰に移動し、そこに腰を下ろすと、本腰入れてシャイアの話に耳を傾ける。

「今朝、王妃様がお使いになつたあと、私、確かに棚へ戻したので
す。ところが、先ほど王妃様が棚を開けられると、櫛がなくなつて
いて……」

「それで、お前がどうかしたと疑われてるのか？」

シャイアがコクリとうなずいた。アユラが軽く息をつく。

「それだけで簡単に人を疑うような方ではないんだが」

何かあるな、とアユラが同意を求める。ラディンとタリクが即座
にうなずいた。

「お前、本当に何も知らないんだな？」

「私ではありません！」

「となると……」

「現場を見たほうがいいな」

タリクが提案する。アユラが指を鳴らした。

「私も今それを言おうと思ったんだ」

「それなら、早いほうがいいですね。もし、犯人が中にいるなら、今ごろ証拠隠滅を諮っているかもしれません」

「そうそう。お前も中々いいこと言うな、ラディン」

アユラがニツコリと笑う。なぜかその瞬間、悪寒を覚えたラディンとタリクであった。

「義姉上、入ります」

アユラが声をかける。すぐに中から応じる声があった。

「ごきげんよう、アユラ」

義理の姉、つまり、国王たる兄の妻カリカ・ラキアが機嫌よく出迎えてくれる。

彼女は飛び抜けて美人ではないが、どこか人を和ませる笑顔の持ち主だ。王もそこが気に入ったのだらうと、民の間では噂されている。だが、それだけではないことをアユラは知っている。

「あら」

カリカ・ラキアがプツと小さく吹き出す。

「ラディンと、もう1人は誰？」

アユラの後ろに、目だけ出して頭からすっぽりと布をかぶった、やたらと背の高い女官が2人いる。

「さすが義姉上。よく、これが奴だと分かりましたね」

「そんなに大きな女官はいないもの」

あつさり見破られたラディンがガツクリと肩を落とす。

「だから、無理だと申し上げたんです」

「そうは言うが、後宮は男子禁制なんだぞ。お前たちが潜り込むには、そうするしかないじゃないか」

「潜り込みたくなかったです！」

「カリカリするな。せっかくの美人が台無しだぞ」

「そうよ、ラディン。せっかく来てくれたのだから、久しぶりにあなたの顔が見たいわ。それ、外して」

鬱陶しいし、とカリカ・ラキアがやんわり命じる。ラディンがすみやかに従い、タリクが続いた。

「あいかわらずきれいな、ラディン」

「ありがとうございます」

ラディンが、あまり嬉しくなさそうに頭を下げる。いいかげん聞き飽きているし、男としてそれほど名誉な賛辞でもない。

おまけに、言うほうも、実はその辺りの反応を面白がってわざと言っていたりする。アユラとタリクが笑いをかみ殺しているのがよい証拠だ。

カリカ・ラキアがタリクに目を留めた。

「見ない顔ね。新しい従者？」

「1月前に拾ったタリクですよ」

「ああ、その人が。噂は聞いているわ」

「へえ」

「どんな噂だか」

ラディンがポツリと言う。

「勿論、あなたとの関係」

カリカ・ラキアがニッコリ笑う。ラディンがむせる。

「もうね、皆うるさいのよ。あなたたちがどうしたこうしたって」
アユラに真相を聞いてほしいと、頼まれることもある。カリカ・ラキアがわざとらしくため息をつき、チラッとラディンを見る。

ラディンが復活した。

「前から不思議なんですが、どうしてそういう根も葉もない話が飛び交ってるんですか？」

「根も葉もないの？」

カリカ・ラキアがアユラを見る。アユラはタリクを見る。タリクはラディンを見、ボソツと告げた。

「お前が俺に妙に突っかかるからじゃないか？」

「それだけで？」

「女というのは、時々妙なことを考えるからな」

「あなた、よく分かってるのね」

おもしろい人、とカリカ・ラキアが口許に手をあて、笑う。タリクを気に入ったようだ。

「それで、そんな格好させてまで、どうして2人を連れてきたの？」

「それなんですけど、義姉上、櫛を失くされたと聞きました」

「櫛…… ああ、そうなのよ、今朝使ったあと、ちゃんとしたはずなんだけど。で、どうして、あなたが知ってるの？」

「シャイアが大騒ぎしてたので」

「あの子ねえ…… 悪い子じゃないんだけど、ちょっと大げさなところがあるから」

「でしょうね」

アユラがうなずく。ラディンとタリクも同意を示す。

「それで、私で何かお役に立てないかと思って、こうして知恵袋連れてお訪ねしたわけです」

「ありがたいこと」

「櫛はどこにしまわれてたんですか？」

「その棚よ」

カリカ・ラキアが指し示す棚に、アユラが近づく。

「1番上の引き出し」

「義姉上が直接出し入れされたんですか？」

「ええ。大事な櫛ですもの。誰にも任せられないわ」

「そのとき、シャイアはそばに？」

「ええ。髪をといてもらったの。そのあと、私自ら引き出しに戻したのだけど、シャイアはその間ずっと見ていたわね」

「ちなみに、義姉上はこの部屋から出られましたか？」

「朝餉のあと、少し散歩に出たわ。なくなったとしたら、そのときね」

「1人で？」

「そうよ」

「シャイアは？」

「部屋の前で見張り」

「じゃあ、やっぱりシャイアが疑わしいか」

アユラは引き出しに視線を戻した。

鏡と小箱が1つあるだけだ。何度見ても、そこに櫛はない。

「ラディン、タリク、どう思う?」

「もう1回、シャイアに話を聞いたほうが早いんじゃないですか?」
ラディンが肩をすくめてため息をつく。タリクはアユラの隣に立つと、中をのぞきこんだ。

「これ、何の毛だ?」

そして、黒い毛を摘み上げる。短くて硬い。アユラが首をかしげた。

「こんなに黒いのなんて、お前の髪ぐらいだな」

「タリクつ、お前、まさかここに忍び込んだのか? 見損なつたぞ!」

ラディンが咆える。タリクが半眼になった。

「『見損なう』ということは、好意をもっていたのが前提だぞ。お前、実は俺のこと好きだったのか?」

「な……っ」

「キヤー、やつぱりそうだったんですねーっ!」

その瞬間、入り口を蹴破る勢いで女官たちが多数なだれ込んできた。

「皆、聞いたわね!」

「ええ、しつかり!」

「ああ、まだ夢を見ているようですわあ」

「夢ではありませんことよ! 皆で聞いたんですから!」

「早く、このことをナリに報告して! 物語にしてもらつたよ!」

「そうですわ、そうですわ」

「皆様、早く行きましょう!」

「はい!」

そして、また一斉に出て行った。

「なんだったんだ……?」

「皆、退屈なのよ。刺激を求めていつも目を光らせ、聞き耳を立てているの」

「と、いうことは」

「お前と俺、公認になったってことだな」

「なんでそうなるっ!？」

「ちなみに、ナリというのは後宮の記録係だね。趣味で物語も書いていて、女官たちの格好の娯楽になっているの。明日には、あなたたちの物語が一回っているわね」

カリカ・ラキアがニツコリ笑う。ラディンが撃沈した。

「本当に、からかい甲斐のあるやつ」

タリクがクツと喉を鳴らす。

「まったくだ。見てて飽きない」

アユラも笑う。

「本当に可愛いわあ。ねえ、アユラ、この子、このまま置いていてくれないかしら？」

「は？」

「十分女官で通用するわ。きっと毎日が楽しくてよ」

「そんなに退屈ですか？」

「刺激がなさすぎるのよ」

カリカ・ラキアがため息をつく。それから、ふと思いついた。

「となると、ラディン目当ての女官が増えるわね。その分費用もかかるから……大変。後宮費倍増で国庫が赤字になるわ!」

ババツ、と数字を弾き出したカリカ・ラキアは、アユラに向き直ってその手を握った。

「残念だけど、あきらめるわ。この子、早く連れて行って」

「義姉上……」

アユラがガックリと肩を落とした。

カリカ・ラキアはこの国一の商家の娘だ。そのため金勘定が得意で、管理もしっかりしている。だからといってケチなわけでも、逆に浪費家というわけでもない。良い使い方を心得ているということだ。

そして、その点こそが兄に気に入られた美德であることを、アユラは他でもない、兄自身の口から聞いて知っているのであった。

王宮の庭は大抵手入れが行き届いているのだが、まれに雑草生え放題な場所もある。まさにその場所で、少女が1人、草引きの真っ最中だ。

まだそれほど日は高くないが、そろそろ暑さの厳しくなる時間。大の男でも嫌がる労働に、その少女は歌など歌いながら勤しんでいる。

「へえ、いい声ですね」

ラディンがまず気づいた。

「うん」

アユラも目を見張る。

高く澄んだ明るい声がうだるような暑さを和らげ、そこだけ涼しい風を運んでいる。

「これは思いがけず掘り出し物かもしれないぞ」

彼女を探していたのは別の用があったからだ、それよりもこっちが大事になってきた。

「ラーシャ」

アユラが名を呼ぶと、少女はビクツと頭を上げた。

「す、すいません！ あたし、さぼってたわけじゃなくて……！」

「見たら分かるよ。安心しろ。私は見咎めたわけじゃないから」

アユラがそう言つてやると、ラーシャがホツと胸を撫で下ろした。やや赤みの強い長い髪をお下げにした、まだ幼さの残る顔立ちだ。自分より少し下ぐらいだな、とアユラが推し量る。

そのとき、ラーシャがやけに目を細めてこちらをジッと見つめていることに気づく。

「どうした？ なにか気に障ることも言っただか？」

「あ、いえ、そうじゃなくて……あたし、ちよっと目が見えにくくて。こうやって細目になると少しましになるから」

「そうなのか。それは不便だな」

「そうなんですよ。だからよく物を壊しちゃったりするんで、まともな仕事もらえなくて」

「それで、草引きか？」

「はい！」

元氣一杯、ニツコリ笑って答える。特別、そのことを恥じてるわけでもなさそうだ。

「ところで、あの一」

「ん？」

「誰ですか？」

どうやら本気で尋ねているらしい。さすがにアユラも虚を突かれてポカンとなる。

真っ先に反応したのはラディンだ。

「この無礼者！」

「え！？」

大声に驚いて、ラーシャが固まる。

「こちらは国王陛下の妹君、アユラ姫なるぞ！ この王宮に仕えていながらお顔もご存知ないとは、無礼にも程がある！」

「姫様あ？！」

慌ててラーシャがその場にひざまづく。

「すいません、すいません！ あたし、まだ王宮に上がったばかりなんで、まだどなたの顔もちゃんと覚えてないんです。本当にすいません」

「言葉使いもなっていないな。お前、出身は？」

ラディンが容赦なく問う。ラーシャがますます縮こまる。そのときアユラが大きなため息をついた。

「ラディン、そんなことはどうでもいい」

「どうでもよくありません！」

「タリク」

「ん？」

「口ふさいでおけ」

「ごうか？」

タリクはすばやくラディンの顎をつかみ、自分の方を向かせる。そして、己の顔（正確には唇）を近づけ

「うわーっ！」

ラディンは彼を突き飛ばすと、一目散にその場から逃げ去った。
「でかした」

アユラがニツコリ笑う。タリクも片方の口角を吊り上げた。

「さて、本題に入らせてもらおう」

アユラがラーシャに向き直る。ラーシャがまた強張った。

「そう固くなるな。ラディンの言ったことなんか気にしないでいい」
「はあ……」

「まずは立て。そんなとこに座ってたら痛いだろう？」

「いいんですか？」

「いいよ。私はそういう過剰な礼儀は嫌いなんだ」

「よかったー！ もうさっきから膝が痛くてしょうがなかったんですよ。助かります」

素直な少女だ。

「それで、お話ってなんですか？」

「君が猫を飼っていると聞いたんで、ちょっと確認させてほしいことがある」

「飼ってるって言うか、餌あげてるだけって感じなんですけど」

「どっちでもいいよ。真っ黒なんだろ？」

「はい。その人みたいに艶々のきれいな黒毛です」

「その猫が、今朝、何か持って来なかったか？」

「櫛のことですか？」

「そう、それ！」

アユラはおもわず指を鳴らした。察しの早い少女で助かった。

「螺鈿細工の見事な品だから、きつと上の方の物だと思ってたんですけど、姫様のだったんですか？」

「いや、義姉上のだ」

「あららら」

ラーシャが苦笑いする。

「というわけなんで、返してもらえるか？ あれは兄上が贈られたものだから、義姉上も困っておられる」

「勿論です！ すぐに取ってきます」

「あ、私も一緒に行く」

「え？」

「せっかくだから、その猫を見たい」

「じゃあ、一緒に連れてきますから、待っててください」

「分かった」

タリクもいることだし、確かにその方がいい。アユラが承諾すると、ラーシャは嬉しそうに笑った。

「お待たせしました」

ほどなく、件の櫛と漆黒の猫を抱いてラーシャが戻ってきた。

「うん、この櫛だ。良かった、すぐに見つかって」

アユラが品物を確認して安堵の息をつく。ラーシャも胸を撫で下ろした。

「わたしも、大騒ぎになるまえで良かったです」

誰かに言って、もし猫を処分しろと言われては困る。さらに言うなら、自分が盗みを働いたようにも言われかねない。それでどうしたのか考えている最中だった。

「でも、どうしてこの子って分かったんですか？」

「そばに黒い毛が落ちててな。猫か犬だろうってことになって、女官たちに聞き込みしたんだ」

猫は珍しくないが、黒いのは1匹しかいない。すぐに、ラーシャの猫に行き着いた。

「皆、本当に綺麗な黒猫だと誉めてたぞ。確かに、ため息をつくほど美しいな」

夜の闇を塗り込めたような漆黒の、艶やかな毛並み。じっとこちらを見つめる瞳は琥珀のきらめき。一度見たら忘れられない。実に印象的な美しさだ。

「ありがとうございます」

ラーシャが嬉しそうに笑った。

「一緒に王宮へ来たのか？」

「いえいえ。でも、ここへ来てすぐぐらいに、庭で行き倒れたの見たんです」

「庭で……」

アユラはおもわずタリクを見た。その視線の意味に気づいて、タリクが苦笑する。

「どうかしました？」

「ん？ ああ、このタリクも庭で行き倒れたんでな。おもしろい符合だ」

「黒髪ですしね。目の色も同じなら、もっとおもしろかったのに」
「まったくだ」

2人が笑っても、タリクは気にしない。

「さて、先に櫛を返しに行ってくる。それが終わったら、ラーシャ、一緒に昼ご飯食べよう」

「え？ わたしが姫様とですか？」

「うん。もう少し話したい」

「で、でも、そんな……ダメです！ 叱られます！」

「私の誘いだから大丈夫。皆、私の掟破りなのは承知だからな」
「本用にいいんですか？」

「いいよ。後で迎えに行くから、部屋で待ってて」

「はい！」

固辞しないのがいい。この少女もだいぶ頭が柔らかいのだろう。そして、少女たちは一旦別れた。

昼食の場所はアユラの部屋に近い庭の木陰。敷物を広げて思い思いに座る。

籠一杯のパンをひよこ豆やヨーグルトのディップで食べる。カバブ（羊肉の串焼き）は香草をたっぷりまぶしてあり、食欲をそられるし、石榴水も今の季節しか味わえない。

「おいしいですー！」

ラーシャがいちいち感想をはさみながら食べる。その勢いは中々豪快で、見ていて気持ちがいい。ここへ来るまでは遠慮気味だったのに。

アユラがクスツと笑った。

「全部食べていいよ。足りないなら、持ってこさせるし」

「これだけあつたら十分です！」

ラーシャが首を振った。

デザートはたっぷり蜂蜜をかけたパイだ。熱いチャイと共に少しずつかじる。

「歌は好き？」

アユラがふいに尋ねた。ラーシャが指についた蜂蜜を舐めながら、目をしばたく。

「さつき、草引きしながら歌ってたから」

「わぁ、聞かれてたんですか！」

「いい声だったぞ。ちゃんと聞きたいな」

「あ、それで、お昼に招待してくださったんですか？」

「ああ」

本当に察しのいい少女だ。

「いやじゃなければ、歌って？」

「喜んで」

ラーシャはチャイで喉を湿らせると、得意の1曲を歌い始めた。

少女らしい高めの明るい声が紡ぐのは、この辺りに古くから伝わる子守歌だ。民の間ではよく歌われている。アユラも市に降りたときは何度か聞いた。

アユラは母の顔を覚えていない。幼い内に死に別れた。子守歌の記憶もあいまいだ。乳母は歌が得意ではなかったらしく、あまり歌ってくれなかったのだ。

「気に入ってもらえましたか？」

歌い終えてラーシャがニツコリ笑う。アユラも笑い返した。

「うん。歌もいいけど、ラーシャの声は本当にいいな。女官ではなく、歌舞団に入れば良かったのに」

「わたしもそうしたかったですけど」

ラーシャがため息をつく。

「歌い手は定員一杯で、これ以上いらないうて言われてしまいました」

「誰に？」

「団長です」

「ふーん」

「でも、それだと行き場なくなるから困るって言ったら、女官の部屋に放り込まれました」

「行き場がない？」

アユラが首を傾げる。

「お母さんが旅商人の後妻になるんです。でも、わたし、この国から離れたくなくて。お母さんの知り合いが歌舞団にいたんで口きいてもらったんですけど……」

結果がこれ。

「兄弟はいないの？ 他に身を寄せられる親族は？」

「いたら、ここにいません」

「それもそうだな」

ということは、ラーシャとその母親はもともこの国の民ではないのだ。だから、母親は旅商人について国を出ていけるのだらう。

「だったら、私の侍女にならないか？」

「え？」

「歌舞団はいらなくても、私は欲しい。ラーシャも声も気に入った。だから、私の侍女になって、もっと歌を聞かせて。先生もつけてやる。どう？」

「すっごいうれしいんですけど、わたし、目のことがあるんで侍女としてはあんまり役に立たないかもですよ？」

「そんなのは他の侍女に任せるし。ラーシャは私の相手してくれてたらいいい」

「いやか、とアユラにジツと見つめられて、ラーシャがポツと頬を染めた。

「い、いやなわけなんです！ わたしでお役に立てるなら喜んで！」

「じゃ、部屋に戻って荷物まとめておいで。女官長には私から言う」

「はい！」

「猫も忘れないで」

「カラもいいんですか？」

「うん」

「ありがとうございます！」

ラーシャはぺこりと頭を下げ、早速部屋に戻っていった。

「姫……」

ラディンがフウとため息をつく。

「説教なら聞かないぞ」

アユラがそっぽを向く。

「説教されるかもしれないことをした自覚はお有りなんですね？」

「というか、お前ならするだろうと思って」

「他の者でもします！」

ラディンが大声を上げたので、アユラは反射的に耳をふさいだ。

「そんなに叱るほどのことでもないだろ？」

タリクが間に入る。

「アユラも年の近い友達が欲しかっただけなんだろうし」

「そう！ そのとおり。さすがタリクだ。よく分かったな」

アユラが笑顔でタリクに飛び付く。タリクはその頭をよしよしと撫でた。

ラディンがムツと口をとがらせる。

「余計な口をはさみ、申し訳ございません！」

強い口調で言い捨てると、ラディンはその場を立ち去った。

「まずい。本気で怒らせたかも」

珍しくアユラが神妙な顔になる。タリクが柔らかに笑った。

「そう思うなら、あまりあいつを挑発するな」

「そうはいうが、売り言葉に買い言葉だ」

あいつの言い方も悪い。アユラが愚痴る。

「とりあえず、謝ってこい」

「そうする」

アユラは素直にそう言うと、ラディンの後を追った。

「本当に、素直な良い姫だ」

見送ってから、タリクは片方の口角を上げ、薄く笑った。

「ラディン、ごめん。言い過ぎた」

彼に追いつくと、アユラは素直に頭を下げた。ラディンが虚を突かれて一瞬ポカンとなる。それから我に返ってアワアワと周りを見渡した。

「姫！ 私などに頭を下げてはなりません。誰かに見られたらいかなさいます！」

「でも、私が悪かったんだから、謝るのは当然だ。お前は本当に私のことを分かってくれてるから、つい甘えて言い過ぎてしまう。本

当に「ごめん」

アユラは譲らず、頭も上げない。ラディンはフウとため息をついた。

「あなたの、その屈託のないまっすぐなところは好きですよ」

ラディンがそう告げると、アユラがパツと頭を上げた。その期待に輝く顔を見ては、誰が文句など言えるだろう。

ラディンはさっきまでの怒りも忘れ、心からの笑みを浮かべた。

「アユラ様、私はあなたの従者であることを誇りに思っております。あなたに仕える喜びに勝るものはございません。これからもあなたに忠誠を尽くします」

「ありがとう、ラディン。私もお前がいい。他の誰かなんて考えたくない」

「もったいないお言葉、ありがとうございます」

ラディンはその場に膝をつくと、頭を下げた。

翌朝。

「姫様っ！」

ラディンのアユラを捜す声が王宮にこだまする。

「また逃げられたのか？」

タリクがため息をつく。ラディンは彼に詰め寄ると、その背後をのぞいた。

「なんだ？」

「後ろに隠れてるかと思ったんだが」

「そんな単純バカは」

「バカとはなんだ、バカとは！ 我が主をバカにするのは許さん！」
そう言っ、剣を抜こうとする。タリクは肩で大きくため息をついた。

「だから単純バカと言っんだ」

「何？」

「ほら、また後ろで女官どもが見てるぞ」

「わっ、いつのまに！　こら、見世物じゃないぞ。散れ！」

振り返ればまさにそのとおり。ラディンは顔を真っ赤にして、女官たちを追い払いにかかる。

その姿を、タリクは生ぬるい笑顔で見守っていた。

ペルージャの王宮は今日も平和である。

【第1話 完】

ある朝の食卓のこと。

「はい、姫さま。あーん」

「あーん」

「おいしいですか？」

「うん、おいしい」

「よかったあ」

ラーシャがうれしそうに笑う。アユラもにっこりと笑い返した。

「あきれた」

ため息をついたのはカリカ・ラキアだ。

「男に生まれてたら、とんでもなく女泣かせな王様になってるわ、あなた」

「どうしてですか？」

アユラが不思議そうに首をかしげる。

「ラーシャがやりたいって言うから、やってもらっただけですよ？」

「女の子にそういうことしたいって思わせるところが、すでにタラシじゃないの」

「誰でもいいってわけでもないんですけど」

「へえ？」

「ラーシャだからいいんです」

「姫さまあ」

ラーシャがハートを飛ばしながらアユラにゴロゴロとすり寄る。

アユラはニツコリ笑ってその頭を撫でてやる。カリカ・ラキアがその光景を半眼で見守っていた。

朝食がすむと、アユラは中庭に出た。

「　　いない」

珍しくタリクの姿がない。いや、毎朝いるわけではないが、いない方が稀。ここで寝泊まりしてるのかというぐらい、大抵ここにいる。ちゃんと部屋もあてがっているというのに。

「ラディンも来ないな」

アユラが外に出ると、犬のような恐ろしい嗅覚でかぎつけて現れるはずの男も、まだやってこない。

「2人で何かやってるのか？」

アユラが何の気なしにつぶやいた、そのとき

「まあ、お聞きになって、皆様！」

女官が数人、茂みから立ち上がった。

「聞きましたわ！」

「ラディン様とタリク様がお2人で！」

「姫様に内緒で！」

「1つの寝台で仲良くお眠りあそばしていらっしゃるなんて！」

アユラがガクツと肩を落とす。

「なぜそうなる？」

「あら、いやですわ。お2人で姫様に内緒だなんて、そういうことに決まってるじゃないですか」

1人が頬を赤らめ、身をくねらせる。他も同じようにキヤーキヤー

ー言いながらクネクネと……。

アユラはムツと唇をとがらせた。

「そんな事実はない」

きっぱり否定すると、その場を後にした。

王宮の一角、近衛隊の宿舎がラディンの住居だ。アユラ付というだけで、元々ラディンは近衛の一員である。

アユラは遠慮なく部屋まで行くと、声もかけずに扉を開けた。が、

その姿はない。

「ホラ、やっぱりいないじゃないか」

べつに女官たちの言葉を信じたわけじゃないが、とアユラは誰にともなく1人つぶやく。

「となると、やっぱりあそこか？」

アユラは部屋を出て、次の目標に向かった。

宿舎に隣接して、演習場がある。アユラが着いたときは丁度朝の訓練中だった。

「おはよう」

声をかけると、皆一斉に振り返る。

「姫様、おはようございます！」

訓練用の剣を置き、一礼。そして、すぐに訓練に戻る。

「こちらへおいでになるのは、久しぶりですね」

サキール隊長がにこやかに笑いながら近づいてきた。

近衛隊はどちらかというと典礼など華やかな場の護りが多いので、見た目の良い若者が選ばれる。サキールもその隊長らしく、人目を惹く容姿だ。もっとも、ラディンほど恵まれてはいないが。

「うん、ラディンが来てないかと思って」

「珍しいですね。姫のほうがあいつをお捜しとは」

サキールがクスツと笑う。

「ラディンから聞いてますよ。最近市場がお好きで、よくお出かけとか」

「うん、まあ……」

「民に混じり、暮らしぶりをその目で見られることは決して悪いことではございません。が、警護の面では少々……」

「ラディンがいるから大丈夫だ」

アユラが目を泳がせる。サキールはそれを見逃さず、ニッコリと笑った。

「では、ちゃんとあいつを連れていってくださいよ。まいたりなさ

らずに」

「どうして知ってる？」

「もちろん、隊員には報告の義務がありますから」

「う……」

「特に、あれは私の弟ですし」

あまり弟を困らせないで下さいと、サキールがとどめを刺す。アユラは思わず一歩下がった。

サキールの兄バカブりは有名だ。女官たちの中にはそれをネタにしている者さえいる。タリクが来てからは下火になったが、今尚健在だ。

「分かった。気をつける」

アユラは苦笑いしながらうなずいた。サキールがニツコリ笑う。空気はやわらいだが、まだなんとなく寒い。

「で、ラディンはどこに来てないんだな？」

「一度顔を見せたあと、侍従長に呼ばれて中宮へ行きました」

「中宮へ？ 兄上はご不在なのにな？」

「ですから、お戻りになるのでしょうか」

支度のためにかり出されたのだと言う。だが、そこから先、アユラは聞いちゃいなかった。

「兄上がお戻りなのか？」

キラキラと目を輝かせて、ガバツとサキールの服をつかむ。

「いえ、まだですが」

「お戻りになるんだな？」

「はい……」

「兄上ー！」

アユラは弾むような足取りで出て行った。

「お可愛らしい方だ」

見送って、サキールがクスツと笑う。

「ラディンもあれくらい私を慕ってくれば嬉しいんだが」

隊長の言葉は正しく独り言と処理され、口をはさむ者はなかった。

王宮は大きく中宮セライムルクと後宮ハレムに分けられる。中宮は政務の場であり、王の昼の居間である。対して、後宮は女たちの住まいであり、王の夜の居間である。ちなみに、前者は女人禁制、後者は男子禁制だ。だが、アユラはそんなことなど一切気にせず中宮に乗り込むと、王の私室に飛び込んだ。

「兄上っ！」

「うわっ」

「あ、なんだラディンか」

兄と思って飛びついたその人は、その以前に捜していた男。アユラはすみやかに離れると、唇をとがらせた。

「どうしてお前がここにいる？」

まぎわらしい……と、アユラがぶつぶつ文句を垂れる。ラディンのこめかみがピクッと引きつった。

「そういうあなたこそ、ここがどこだか分かっておいでですか？」

「兄上の部屋だ」

「そうです、『中宮』にある『陛下の居間』です。姫が出入りなさって良い場所ではありません。早く後宮へお戻りください」

「分かってないのはお前だ、ラディン。兄上は私がここに入出入りすることを許してください。問題ない」

「それは陛下がいらっしゃるときの話です！ ご不在のときはダメです！」

「なんだ、まだお戻りじゃないのか？」

「はい」

間髪入れず返されて、アユラがしょんぼりと肩を落とした。

「そうか、まだか……」

「でも、昼までにはお戻りになると思いますよ」

アユラがパツと顔を上げた。

「本当か？」

「先触れの言い方からして、それぐらいかと」

「じゃあ、昼は一緒に食べられるかな？」

「台所にそのように伝えておきましょう」

「ありがとう、ラディン！」

アユラが顔を輝かせ、ラディンに飛びつく。ラディンは硬直した。

「あの、姫様、そういうわけですから、私はこちらで陛下をお迎えする支度をせねばなりません。申し訳ございませんが、今日は姫様にお供できませんので、お部屋でおとなしくしておいてください」

「外へ行くなということか？」

「はい」

せつくなおったアユラの機嫌がまた一気に降下する。ラディンから離れると、アユラはその顔を敵でも見るような視線で見上げた。

「そんな顔なさつても無駄ですよ」

ラディンも負けてはいない。眉をキリツと上げて見返す。

「分かった。じゃあ、せつくだから兄上のお戻りを祝って舞を披露することにする。今日はおとなしくその練習をしておく」

「それは良いお考えですね。陛下もきつと喜ばれますよ」

「うん！」

アユラはニツコリ笑うと踵を返した。

「あ、ところで」

部屋を出る際に、振り返って尋ねる。

「タリクを見なかったか？」

反射的にラディンの顔が険しくなる。

「どうして私がいちいちあいつの行動を把握してなきゃならないんです？」

「知ってるか聞いただけじゃないか。怒らなくてもいいだろう？」

「知りません！」

だから、どうしてそんなに怒るのだろう。アユラは笑いたいのを必死にこらえらながら、部屋を出た。

戻る前に、庭に立ち寄る。

「あ、いた」

今度はタリクの姿があつた。座つて、何か考えているような……
と思つてよく見ると、黒猫のカラと遊んでいるだけだつた。

「タリク」

呼びかけながら近づく。タリクが顔を上げ、カラも愛想よく鳴いた。

「おはよう」

「おはよう。今日は遅い登場だな」

タリクが軽く口角を上げる。アユラも負けじとニンマリ笑つた。

「お前こそ。さっき通つたときはいなかったくせに」

「ああ、今日は寝坊したからな」

「何かしてたのか？」

「別に」

「まさか、ラディンと一緒にだつたとか？」

「お前も大分毒されてきたな」

タリクがクツと喉を鳴らす。

「女官たちには悪いが、あいつとどうこうなんて、考えたこともない」

「その割には、よく絡んでる」

「面白いからな」

「ふーん」

「何かあつたのか？ 元気がないな」

そう言われて、アユラは大きくため息をついた。そして、タリクの隣に座る。そこにいたカラがあわてて飛び退いた。

「兄上が帰つてこられる」

「どこかに行つてたのか？」

「言わなかったか？ 港の視察だ」

「ふーん」

大陸内部はティンパーロン砂漠が広がっている。だが、その面積の3分の2近くを占めるのは、実は2つの湖だ。

東側にティンロー、西側はハールーン。ティンローのほうが大きくて、これを渡るだけで砂漠のほぼ中央まで進むことができる。そこで1度陸に上がり、2日ほど歩いて次のハールーンの港からまた水路を行く。これで砂漠の3分の2は横断したことになる。

湖の沿岸にはオアシスが点在していて、それぞれ都市国家を成している。ペルージャもそうした国の1つだが、特にティンローとハールーンの間位置し、両方の港を押さえているため、他の国よりも繁栄している。

交通の要衝を押さえることはすなわち、人も物も金も常に集まるからだ。だからこそ、国王は定期的に2つの港を視察して回る。今回もティンロー側のマゼラス港へ赴いた帰りだ。

「それで、どうしてそんなにしょげてるんだ？ 兄上とは仲良しじゃないか。嬉しくないのか？」

「嬉しいに決まってるじゃないか。いつもお土産を持って帰ってきてくれるし、他国のおもしろい話も聞かせてくれる。すごく楽しみだ。ただ――」

アユラはフウとため息をつく、立てた膝に顎を乗せた。

「私はそうやって、ただお帰りを待つことしかできない。男なら一緒にすることもできるし、逆に、もう一方の港を視察して、兄上のご負担を減らすことだってできる。女だから、何のお力にもなれなくて……それが歯がゆい」

「ああ、だから男に生まれたかったなんて言ってるのか」

タリクがそう言っていると、アユラはコクリとうなずいた。

「確かに、お前の言うことも分かるけど」

タリクは小さく笑うと、アユラの頭にポンと手を置いた。アユラが顔を上げ、彼を見る。

「でも、べつに女だっていいじゃないか。ついて行きたいなら、ついて行けばいい。お前は中宮にだって平気で出入りできるんだから、男女の別など関係なく、兄を補佐する人間になれるだろう」

「本当か？」

「まあ、言うだけ言ってみたらどうだ？ 行動に移さなくては、なるものもならないからな」

「うん！」

アユラの顔に笑みが戻った。

「なんだか、タリクも兄上みたいだ」

「そうか？」

「タリクは、兄弟いないのか？」

「さて……」

タリクは視線を外すと首をかしげた。

「いたような気もするし、いなかったような気もするし」

「思い出せないか？」

「そのようだ」

「あいかわらず、名前と来た方向だけか」

「ただ、思い出そうとすると大体頭痛がするんだが、今は痛くないな」

「え？」

「兄弟や家族のことを考えても、頭痛がしない」

「それって、つまり」

「元々いないのかもな。ということは、俺は天涯孤独というやつだったのか」

「だったら、ますます都合だ。このままこの国に住んでしまえ」

「簡単に言うな、お前は。本当に」

タリクがクスクスと笑う。アユラは身を乗り出すと、彼の服を掴んだ。

「思い出せない過去なら捨てたっていいじゃないか。それより、ここにお前を必要とする人間がいるんだから、新しく生き直せばいい。」

ラディンに聞いたが、そこそ剣は使えるんだろう？　だったら近衛に入ればいい。お前の容姿なら問題なしだ」

「いきなり近衛隊は無理だろう。まずは軍属になって、それからじゃないか？」

「私が推薦する」

「アユラ、いくら気に入った人間だからといって、上に立つ者が手順を無視して物事を進めてはダメだ」

「でも……」

「ラーシャのときも、それでラディンに怒られたろう？　忘れたか？」

「う……」

「お前の裏表のない言動は魅力的だが、度が過ぎると諸刃の剣だ。使い方をよく学ぶんだな」

「分かった」

アユラはコクリと素直にうなずいた。

いつもの昼食時間を少し回ったところ、前庭で王の帰還を告げる声が上がった。

「兄上！」

聞きつけたアユラが顔を輝かせてそちらへ向かう。進路上にいた者達があわてて道を空ける。

「兄上、お帰りなさいませ！」

そして、その姿を見つけるなり飛びついた。

「ただいま、アユラ」

背中に張り付く妹に向けて、低い豊かな声がかかる。ついで、頭にふわりと手が置かれ、軽くポンポンと弾ませる。アユラは顔を上げ、兄を見た。

赤みの強い髪、柔らかな茶色の瞳は、大多数の国民に共通だ。アユラと似ているのは、強いて言うなら顔立ちか。キリツと引き締まった、線の際立つ目鼻立ち。

2人の共通点と差異は、母が異なる故だ。

「旅はいかがでしたか？ 早くお話を聞かせてください！」

アユラが目を輝かせる。セイラムはその顔を見つめて、小さく笑う。

「今回は、あまり楽しい話はないが。おいで。食事しながら聞かせてやるう」

「ありがとうございます！」

アユラは兄と腕を絡めたまま、城内へ入った。

「ホラ、土産だ」

そう言ってセイラムが取り出したのは、1冊の本。濃紺を基調と

して鮮やかな色糸をふんだんに使い、繊細な柄を描き出した織物で表装されている。

「わぁ、すごい綺麗です！」

アユラは目を輝かせながら、しばらくその表装を眺め、細かな柄を指先で追った。滑らかな質感。絹だ。

「ちょうど、バスラからの船が着いたところで、色々面白い品があった。ティンロー周辺の国を順に巡り、商いしているらしい」

「バスラ！ 道理で、手の込んだ品だと思った」

大陸東部を版図とし、最古の歴史を誇る大国。いまだ何者の侵略も許さぬその王都ラフラバードには、長い年月の間に培われた高い技術と美に彩られた文物があふれている。

「あ、これ、アルミダ王子の冒険譚だ！ この話、大好きです！」
題名を読み取って、アユラがますます目を輝かせる。セイラムがクスッと笑った。

「小さい頃、よく読み聞かせてやったな」

「特に、クーロン山脈に迷い込み、白い虎に助けられる話が大好きで……あ、これ、その話だ！」

「良かった、記憶が間違つてなくて」

セイラムがホッと息をつくその横で、アユラはもう頁をめくっている。流麗な筆致や余白を飾る紋様の美しさにもため息が出る。

そんな妹の姿を、セイラムがほほ笑ましく見つめる。

「ありがとうございます、兄上。大事にします！」
「ん」

「昼食をお持ちしました」

その場合で、小姓たちが膳を運び込む。

「カリカ・ラキアはまだか？」

「ただいま支度中でいらっやいます。まもなくお渡りになられるかと」

「そうか。では、先に食べ始めるとしよう」

セイラムが食事前の祈りを促す。アユラはそれに従った。

「それで、その男はどうなったのですか？」

アユラはケバブの串を握りしめながら身を乗り出す。

「きつとお前が喜ぶだろうと思って招待しておいた。そのうち現れるだろう」

「同行していたのですか？」

兄の姿しか目に入れてなかったので、気づかなかった。

「いや、別だ。マゼラスをもう少し見たいらしい。あきたら都へ来ると言っていた」

「楽しみです！」

セイラムはその顔を見て、軽く口角を上げた。

「他に、なにかありませんか？」

「これで全部だ」

「今回は、あまり楽しいものではなかったんですね」

「視察は、遊びではないんだよ」

セイラムが苦笑する。たまたま今回はいつもより土産にできる話が少ないだけだ、と。

アユラは1度視線を外した。それから思い切って兄を見つめなおし、口を開く。

「楽しい話でなくてもかまいません」

「とは？」

セイラムが眉をひそめる。

「マゼラスで兄上が見聞きされたこと、ありのままを知りたいんです」

「なぜ、そんなことを知りたがる？」

「兄上のお役に立ちたいと思うから」

「気持ちだけで良い」

セイラムは妹をまっすぐ見つめると、言い聞かせるように告げる。
「お前やカリカ・ラキアの笑い、楽しく過ごす姿を見るのが、何よりの励みだ。難しい顔などしてほしくない」

「義姉上と私は違います!」

「思いあがるな、アユラ。お前もカリカ・ラキアも、私の護りの内だ」

「でも、私は王家の生まれです。兄上と一緒にこの国を、民を護りたいんです!」

「人手なら間に合っている」

「どうしてダメなんですか? 女だからですか?」

「言わずもがなのことを聞くな」

口調こそ穏やかだが、とりつく島のない言葉。アユラはキュッと唇をかんだ。

「やっぱり、男に生まれたかった」

ぼつりとこぼし、部屋を出て行った。

妹の後ろ姿を見送って、セイラムが、やれやれ、とばかりに首を振る。そのとき。

「もう少し言い様があるでしょうに」

紗幕をくぐって、カリカ・ラキアが現れる。そのクスクスと笑う様を見て、セイラムは溜息をついた。

「アユラは己を知らなさすぎる。男に生まれたかった? ああ、男に生まれていれば、あいつこそが王だった」

アユラは妃の子、セイラムは夫人の子だ。共に男なら、生まれの順に限らず、アユラが世継ぎとなるところ。

「もったいない。あいつこそ王にふさわしいのに。見た目も、中身も……民が求める王の像そのもの」

「そうね。少なくとも、あの子は誰かさんみたいに自分は王の器じゃないとか、王になりたくなかったとか、グチグチ言わないでしょうしね」

「カリカ・ラキア」

「はい?」

「俺はただ書物を読み、この大陸の歴史を学びただけなんだ」
「知ってるわ」

「欲しいならくれてやる。王の座など重いだけ。でも、アユラにはやらない」

「女だから？」

「違う。あいつにはあのまま自由に、思うまま生きさせてやりたい。こんな重荷をあいつに背負わせたくない」

「結局、あの子がかわいくてしかないくせに。それならそうと言えばいいのよ。どうして誤解を招く言い方しかできないのかしらねえ」

「言ってる」

「はいはい、しょうのない人」

カリカ・ラキアはクスッと笑うと、セイラムを抱き寄せた。

「疲れてるのね。ゆっくりお休みなさい」

幼子をあやすように、カリカ・ラキアが彼の背を撫でる。セイラムは身を任せ、目を閉じた。

「バスラが動いたぞ」

「え？」

「ティンロー周辺で残るのは、もう我が国だけだ」
セイラムはそれきり口を閉ざした。

「姫？」

アユラが廊下を走り去るのを、ラディンが見咎める。黙って後を追った。

アユラは中庭の円亭で止まった。肩を落とし、うなだれた後ろ姿が痛々しい。

「姫、どうかなさったのですか？」

ラディンが声をかける。振り返ったアユラの目は、心なしか潤んでいる。

「なんでもない」

「そんなふうに見えませんか？」

ラディンは小さくため息をつくとき、彼女のそばに寄った。アユラは視線を外し、またうつむく。

ラディンはその腕の中に1冊の本を認めた。アユラが大事そうに抱えるそれは、ラディンも初めて見るものだ。

「美しい本ですね」

おもわず声に出すと、アユラの肩がピクッと跳ねた。

「だろう？ 兄上のお土産だ！」

アユラはわざとらしいくらい声を弾ませ、答える。

「バスラの商人から買い求めてくださったんだ。しかも、私の好きなアルミダ王子の冒険譚だぞ！」

「それは良かったですね」

ラディンがほほ笑むとき、アユラも笑った。だが、すぐにその顔がくもる。

「私はバカだ」

ポツリとこぼす。

「兄上のお力になりたいのに、兄上を怒らせてしまった」
「姫？」

「兄上に嫌われたかもしれない……」

本を強く抱きしめ、肩を震わせる。すぐに嗚咽が聞こえてきた。ラディンは驚きのあまり固まってしまう。

「そこ、何をポケットとしてる」

そのとき、茶化すような声が聞こえてきた。

「泣いてる女の子は抱きしめてやるもんだ」

「タリク」

ラディンが額に青筋を浮かべ、その男をキッとにらみつけた。タリクがおもしろそうに見返してくる。

「相手が姫でも主でもいいじゃないか。ホラ、早くしろ」

「う、うるさい、黙れ！」

ラディンが怒鳴る。それで、アユラも我に返った。

「タリク、ダメだった。やっぱり、女では兄上の力になれないらしい」

「そうか。残念だな」

「うん……」

アユラは小さくうなずくと、その場から走り去った。ラディンが後を追いかけてようとして、思いとどまる。それから、タリクを振り返った。

「ん？」

タリクがおもしろそうに彼を見返す。

「お前、姫に何を言ったんだ？」

「兄上の力になりたいと言うから、正直にそう伝えてみると言っただけだ」

「余計なことを！」

「そうか？」

タリクが首をかしげる。ラディンは彼に駆け寄ると、その襟元を掴んだ。

「女性が政務に口をはさむことはできない。他はどうか知らないが、我が国では厳しく戒められているんだ。それを！」

「アユラは中宮にも出入りしているし、そのあたりは甘いのかと思っただ」

「事情も知らぬ人間が軽はずみに口を挟むな！」

姫がどんなに傷ついたか、とラディンが目を伏せる。それから、またタリクを強くにらみつけた。

「いいか、二度と余計なことは言っな。黙っておとなしく庭の片隅に寝ておけ！」

「そうは言ってもな。何が余計なことか分からないから、多分また何か言ってしまうだろうな」

「だから、黙って寝ていって言うてる！ 次にこんなことがあれば、私はお前を許さない」

「怖い怖い」

タリクがクツと喉を鳴らす。ラディンは反射的に手を挙げそうになつて、グツと堪えた。

乱暴に彼を放す。

「今日はもう二度とその顔を見せるな」

「随分嫌われたな」

「お前など、元から大嫌いだ！」

言い放つと、ラディンもその場を走り去った。

「大嫌いときたか。痴話ゲンカみたいだな」

タリクはその背を見送りながら、愉快そうにクスクスと笑った。

アユラは後宮の自分の部屋へ戻った。絨毯の上に座り、深いため息をつく。

（分かってたけど、かなりきつい……）

自分が相当甘く考えていたことに、改めて気付いた。

ペルージャでは、かつて女王の時代が3度あった。そのどれも執政が著しく乱れ、最後の女王のときには他国の侵略を受け、存亡の

危機に立たされている。

以来、女王は禁忌となった。政務に携わること自体禁止され、中宮から完全に遠ざけられた。

だからこそ、中宮に出入りできるアユラは異例であり、それを許した王に危険を感じる臣下も多い。それと知っているから、ラディンはうるさく叱るのだが、アユラは今まであまり気にしていなかった。

「姫さま？」

ラーシャが紗幕の影から顔を出す。

「泣いてらっしゃるんですか？」

「泣いてないよ。ただ、ちょっと悲しいだけ」

アユラは顔を上げると、無理に笑ってみせた。そのとき、カラが飛び出してアユラの膝に擦り寄る。アユラは本を傍らに置くと、カラを抱き上げた。

「姫様、舞の練習しましょう？」

「え？」

「王様に見ていただくんでしょう？ わたし、いいこと思いつきました！」

ラーシャはニコニコ笑いながらアユラの手を取る。カラが抗議の声を上げながら飛び降りた。

「いきましょ！」

「どこへ？」

「市場です！」

ラーシャに強く引つ張られて、アユラはワケが分からないまま連れ出された。

後宮を出たところでラディンに出くわす。

「姫、どちらへ？」

「市だ！」

「なっ！ 市はダメと何度言ったら……」

「いいから、お前も来い！」

さっきまで泣きそうだった顔が、もう笑っている。それは良いとして、一体、市場へ行って何をするのだろう。

ラディンもワケが分からないまま、とにかく後を追った。さらに、その途中でタリクも拾う。

「なんでお前までついてくるんだ！」

ラディンが咆える。

「アユラが来いと言うから」

「いいか、絶対余計なことは言うな、見るな、聞くな！」

「走りながらわめくと、舌を噛むぞ」

「噛ま　　っ！」

「ほら、噛んだ」

タリクがニヤリと笑う。ラディンは口許を押さえながら、彼をキツとにらみつける。その目には涙。

「何やってるんだ、ラディン」

アユラが振り返り、爆笑した。

日が落ち、夕食の時間となる。

常にはセイラムが後宮へやってきて、広間にてカリカ・ラキア、アユラと共に摂る。献立は慎ましく、特別な余興もない。

ただ、今日はセイラムが視察から戻ったことと、アユラへの詫びの意味をこめて、宴の予定となっていた。

だが、肝心のアユラがまだ戻っていない。外出したままだ。

「ラディンとタリクを伴っているので、おかしいことにはなっていないと思いますが」

サキールが報告する。セイラムは「そうか」と告げ、小さくため息をついた。

「お迎えに行ってみましょうか？」

「行き先は分かるのか？」

「おそらく市と」

「まあいい。もうしばらく待つて、それからで」

そのとき、表の庭のほうからにぎやかな音楽が聞こえてきた。

「なんだ？」

「報告させます」

サキールが合図しようとしたそのとき、ラディンが現れた。

「姫は一緒ではないのか？」

サキールがいぶかしむと、ラディンはニツコリ笑って王の前にひざまずいた。

「陛下、今宵の余興にと、姫が演出なさいました。どうぞ表の広場にお越しください」

「そういうことか」

いかにも民が好みそうな音楽だと思ったら。セイラムは苦笑すると、ラディンの案内に従った。

騒ぎを聞きつけた役人や宮仕えの者たちが次々と集まってくる。そこへセイラムが現れると、皆道を空け、前へ通した。

表の広場は国の祭礼などに使われる公の場だ。その際には広く民にも開かれ、酒食が振る舞われたりする。そこに、アユラは市場周辺で集めた、にわかごしらえの歌舞団を引き入れていた。

シタールやタブラなどちゃんとした楽器もあるが、大半は適当に作った笛や鳴り物のようだ。時折調子外れな音が混じるが、それもまた一興。にぎやかに、楽しく、流行りの歌曲など奏でている。

ラーシャの案内で、カリカ・ラキアと女官の一団も到着した。

「にぎやかね」

「まるで酒場だ」

「いいじゃない、楽しいもの」

カリカ・ラキアがクスクスと笑う。セイラムは苦笑した。

数人の男女が踊り始めた。組になったり、離れたりと忙しい。その中に、アユラとタリクの姿もある。

アユラは元々踊りが得意だが、タリクも中々堂に入っている。もともと、民が祝い事などの折に舞う素朴な踊りだ。複雑な振り付けではないが。

「兄上！」

アユラがその姿に気付き、動きを止めた。皆にはそのまま続けるよう指示し、自分は兄の前に進む。

膝をつき、頭を下げる。その半身後ろでラディンもひざまずいた。「お許しも得ず、勝手に皆を引き入れて申し訳ございません」

「本来なら叱るところだが、今宵は許そう。民の楽しそうな顔を見られたこと、嬉しく思うぞ」

セイラムがそう告げると、アユラは勢いよく顔を上げた。満面の笑みを浮かべる。

「では、とっておきの出し物です。ラーシャ！」

「はい！」

アユラに呼ばれて、ラーシャが楽団の前に立つ。手を振って1度

演奏を止めさせると、アユラを振り返った。

アユラがうなずく。ラーシャは楽団に視線を戻し、合図を送った。うってかわって、優しいゆったりとした音楽が始まる。ラーシャがそれに併せて歌う。その歌声だけでも、見物人たちの間から感嘆の吐息がもれるのに……。

アユラが踊りだした。指先まで意思の通った細やかな手の動き、柔らかな身のこなし。情感あふれる舞に、皆、目を見張る。

セイラムも少なからず驚いていた。男舞しか見せたことのない妹が、こんなふうにも舞えるなんて。

「お前は、知っていたか？」

「いいえ、初めて見るわ」

カリカ・ラキアも感心している。

「こんなふうにしていれば、『青い華』の譬えどおり、麗しい姫君なのよねえ」

もう何年かすれば、求婚者が列を成すに違いない。カリカ・ラキアがそう言つと、セイラムが眉をひそめる。

「だとしても、あいつには良い縁を結んでやりたい」

アユラの望まぬ相手、泣かせるような男には絶対嫁がせない。セイラムがそんなことをつぶやいている目の前で、ラディンがアユラの手を取った。そのまま組んで踊りだす。

「あつ」

セイラムがとっさに上げた声は悲鳴にも似て……。

「兄バカなんだから」

カリカ・ラキアがプツと吹き出す。セイラムはバツが悪そうに唇を曲げた。

見目麗しい男女の組舞に、見物人からはため息しか上がらない。美しいものが大好きな女官たちも、うつとりと見つめている。

一区切りついたところで2人が離れる。そのときを待っていたかのように、今度はタリクがアユラの手を

「キヤーっつっ!!」

女官たちが我に返って大歓声を上げる。

「あーっ！！」

それに負けないぐらいの悲鳴を上げたのはサキールだ。

そう、タリクはアユラではなく、なぜかラディンの手を取っていた。

「おい……？」

ラディンが陰悪な声を出す。

「ここで俺がアユラの手を取ったら、王に殺されかねないからな」

「だからって、どうして私を……コラ、放せ！」

タリクは抗議を無視すると、強引に彼を女役にして踊りだした。

呆然と見ていたアユラが笑い出す。ラーシャは歌うのをやめ、楽団はおもしろがってわざとテンポの速い、滑稽な曲に変えてくる。

「はーなーせーっ！！」

ラディンがその手を振りほどこうと、懸命に暴れている。だが、タリクはその動きを巧みに利用し、踊っているように見せかける。器用というか何というか……。

だが、オチとして見るには格好の出し物だ。アユラをはじめ、見物人の大半には大受けて、皆腹を抱えて笑っている。

受けていると言えば、一部の女官たちにもだ。ただし、別の意味で。彼女らは蕩けた目で食い入るように見つめている。

完全に魂を持っていかれているらしい彼女らの様子に、カリカラキアが苦笑した。ふと横を見ると、セイラムが「ざまあ見ろ」とばかりに、満面の笑みを浮かべている。

さらに、彼の後ろ、サキールの様子を伺うと

「おのれ、タリク！ 私のかわいい弟になんとこの不埒なマネを！！」

「隊長、堪えてください！」

「陛下の御前です、お控えください！」

今にも抜剣しそうな隊長を、部下たちが必死に抑えている。

「どれだけ兄バカなのよ」

カリカ・ラキアは一気に脱力した。

王の指示で、急遽集った者すべてに酒食が振る舞われた。そうして、時ならぬ宴は夜中まで続いたという。
今なお、ペルージャは平和である。

終

セ……

「う……」

コ……コ……

「あ、あ……っ」

コ……コ……

『殺せっ！』

「っ！」

ガバツと起き上がり、そのまま荒い息をつく。

（今は……？）

タリクの背を冷たいものが流れる。

いやな夢。

暗い、暗い、どこまでも真っ暗な空間で、ただその声だけが響いていた。無機質な平たい声が、ただ「殺せ」とだけ。

（でも、俺は……）

その声を知っている

体が重い。特に下腹の辺り。得体の知れぬ不快感に、起き上がるのも億劫だ。

しかも、心なしか体が熱い気がする。

（熱とか？）

アユラは寝台に転がったまま天井を仰ぎ、ため息をつく。

仮に発熱だとして、だったら、この下腹の痛み……というか、不

快な重さはなんだろう。もう少し上で、吐き気もあれば、食あたりかと見当をつけるところだが。

これは、かつて味わったことのない不調。
(とりあえず、典医を呼んできてもらおう)

「ラーシャ」

寝そべったまま声をかけると、ほどなくしてパタパタと軽い足音が近づいてきた。

「おはようございます、姫様」

語尾にハートマークを飛ばしながら、ラーシャが紗幕を上げて顔をのぞかせる。とたん、首をかしげた。

「おはよう……ではないですか、姫様？」

「んー、おはようなんだけど……ちよつと調子が悪くて」

「大変っ！ どこがヘンですか？ 頭？ おなか？」

「下腹」

「どんなふうですか？」

「重い。で、体がなんとなく熱っぽい」

「下腹……重い……あ、もしかして！」

「？」

「姫様、それは」

耳許でラーシャの告げた「病名」に、アユラが目を見張る。

「うそだろ？」

「着替えるときに見れば分かります。ていうか、姫様、まだだったんですか？」

「うん」

「わたしでももうなってるのに？」

「えっ、それは早すぎないか！？」

「こんなもんですよ。姫様が遅いんです」

「う……」

そう言われては二の句が告げないアユラであった。

「あらあら、ついに始まつちやつたの」

「『女』になど、なりたくはなかったです」

「こればかりは仕方ないわねえ」

心底辟易しているらしいアユラを見て、カリカ・ラキアがため息をついた。

女として生まれたからには、これは避けて通れぬ道。いつまでも子供のままではいられない。

それでも、アユラは遅いほうだ。齢14といえば、とくに初潮を迎えている。早い者なら、すでに子供の1人も産んでいる年だ。

「最近、なんとなく娘らしくなってきたなと思ってはいたけど」

そう、始まつたの……と、カリカ・ラキアがつぶやく。アユラはムスツと口をとがらせたままだ。

「ホラ、いつまでもそんな顔をしてないの。あなたの気持ちは分かんなくもないけど、一応これはおめでたいことよ。これで、あなたも晴れて一人前の大人になったのだから」

「だから、イヤなんです。成人してしまえば、本当に女として扱われる。もう、中宮に出入りすることもできない。今までのように、気安く兄上のおそばにいけない！」

「そうね。あなたの我がままは、すべて子供であつたからこそ許されていた。女になってしまえば、家から出ることは叶わない。良家の女は、本当に不自由だわね」

「ラディンにもタリクにも会えない。剣も持たせてもらえない。市にも降りられない！」

我慢の極に達したか、アユラの目から涙が溢れ出した。カリカ・ラキアは義妹をそつと抱き寄せると、その背を撫でた。

年長の女には分かっていた。かつて、自分も通つた道だから。

最初は誰でもそうなのだ。己の体の変化に戸惑い、得体の知れぬ不安に襲われ、情緒不安定になる。ことに、アユラは男に生まれたかったと豪語していただけに、ショックも大きいだろう。落ち着くには時間がかかるかもしれないが、あまり刺激せずに見守るしかな

い。

ともあれ、セイラムには伝えなくてはと、カリカ・ラキアは段取りを頭の中で思い描いた。

「ここが麗しの都か」

1人の青年がまぶしそうに王城を見上げている。

薄汚れてはいるが造りのしつかりとしたローブに身を包み、大きな袋とサズ（弦楽器の1種）を肩に担いでいる。フードの下からのぞく顔は20歳前後くらい、琥珀色の瞳は好奇心旺盛な輝きだ。

「では、参るとしましょうか」

袋を担ぎなおすと、青年は城目指して丘を登りだした。

「陛下、カリームと名乗るサズ弾きが参っておりますが」

侍従が首をかしげて告げるのに、セイラムはニツと笑って答えた。

「やっと来たか。あれから半月たつから、もう来ないのかと思ったが」

「何者でございますか？」

「先だってマゼラスに視察した折、見つけた。語りもやってるらしくてな。アユラが好みそうだから、招いておいたのだ」

「そのような得体の知れぬ者を……」

「マゼラスには諸国の船が集まってくる。荷だけでなく、人もまた流れてくるのだ。いちいち疑っていてはきりが無いわ」

「ですが」

「いいから、中へ入れてやれ。近衛の1人でも見張りにつけておけば、そうそう悪さもできんだろうよ」

「かしこまりました」

侍従は不承ながらもその言葉に従った。

「さて」

セイラムはきりのいいところで執務を切り上げると、後宮に向かった。

カリカ・ラキアから話があると言われていたから、ついでにカリムのことを知らせてやるつもりだった。

後宮は、妙に慌しかった。バタバタと走り回る女官に何人ぶつかりそうになったことか。

「何かあったのか？」

セイラムが開口一番尋ねると、カリカ・ラキアは苦笑した。

「ああ、ごめんなさい。めでた事で、皆浮き足立ってしまってるものだから」

「めでたいこと……まさか」

セイラムが期待に目を輝かせたので、カリカ・ラキアはあわてて手を振った。

「ああ、違うの、それじゃないわ。まぎらわしい言い方をしてごめんなさい」

「では？」

「アユラよ。初潮を迎えたわ」

「来たのか、ついに」

セイラムもまた複雑な色をその瞳に浮かべた。

「確かに、人としてはめでたいこと。身内ならば祝ってやるべきだろうが」

「あら、あなたまで素直に喜べないの？」

兄バカのせいかと思ってカリカ・ラキアは笑おうとしたが、どうもそれだけではないらしいことを瞬時に察する。

ややあつて、セイラムが小さくため息をついた。

「幾つか縁談が来ている。あいつがまだ成人してないことを理由に断ってきたんだが」

これで断る理由がなくなった、ということらしい。

「良い話は一つもないということ？」

「我が国の富をねらうもの、バスラの脅威に備えるため手を組もうというもの。そんなものばかりだ」

「王家の女の宿命ね」

カリカ・ラキアもまたため息をついた。

「とりあえず、今夜は祝いの宴なのだけど、あなたはどうするの？」

「出る。せつかくカリームが来たのに、俺がいなければ後宮に入れんからな。あいつの語りで、少しはアユラの気もまぎればいいが」
「そうね」

それよりも多分、今までどおり自由に王城内を駆け回り、市に降り、ラディンらと会う許可を与えてやったほうが気も晴れると思うが。カリカ・ラキアはそう思ったが、あえて口にしなかった。

今日はどうやらアユラの「お出かけ」はないらしい。

いつまでもアユラが出てこないの、ラディンはそうと見切りをつけた。

「何かあったのかな」

常日頃、脱け出すなと口やかましく言っではいるが、いざ出てこないとなるとなにやら寂しくもある。いやそれより、彼女の身に何かあったのかと、逆に心配になってきた。

侍女の1人でも捕まえて聞いてみようかと思ったが、それはそれで厄介なことになりそうだと気付く。

「これはこれは。珍しくラディン殿が暇そうだ」

こんな嫌味なことを言う奴は1人しかいない。ラディンはムツと口をとがらせて振り返る。案の定、そこにはタリクがいた。

「だったら、何だ？」

「べつに？」

「いーや、絶対に何か言いたいに決まってる」

「よく分かったな」

「やっぱり！」

「ついでに、何と云うつもりだったか当てられるか？」

「知るか、そんなこと！」

ラディンが怒鳴ると、タリクは片方の口角を吊り上げた。そして、言うには

「お前、人を殺したいと思ったことはあるか？」

「ちょうど、今そう思っていたところだ」

「俺か？」

「よく分かってるじゃないか」

ラディンも口角を上げて、ニツと笑う。

「久しぶりに手合わせするか？」

「受けて立とう」

タリクが提案すると、ラディンも迷うことなく承知した。

兵舎の広場に時ならぬ人ばかりができる。

輪の中心にいるのはラディンとタリク。それを近衛の兵士だけでなく、手持ち無沙汰な侍従や下男たちまでもが見守っている。

「今日はえらく本格的なんだな」

この2人、時々対戦しているが、いつもは防具すらつけずにケンカまがいの打ち合いをしているだけだ。それが今日は訓練用の防具をつけ、木製の盾と剣を携えている。

「ついに決着つける気になったのかな？」

「なんの？」

「姫様だよ」

「えーっ!？」

「そこ、静かに見ている」

審判を任された副隊長がギロツとにらむ。ざわめきはピタリとやんだ。

「そういえば、隊長がいらっしやらないな？」

「うん、さつきから気になってたんだ、おれも」

弟が可愛くて仕方ない近衛隊長サキールの姿がない。こんな大々的な場なら、当然立ち会いそんなものなのに。

「隊長なら、勝負次第で流血沙汰になりかねないからと、部屋に閉じ込めてきたらしいぞ」

「え？」

「と、副隊長が言ってた」

「あー……」

誰もが納得した。

「はじめ！」

副隊長の号令で、ラディンとタリクが身構えた。

兩人とも隙の無い構えで相手の出方を探り合う。先に動いたのは

タリクだ。まっすぐにラディンの懐へ飛び込んでいく。当然のようにラディンは左へ避け、かわしざま、タリクの背をねらって剣を振り下ろした。

タリクは盾で背中をかばう。ラディンの剣が当たった反動でそれを弾き飛ばし、振り向く。ラディンもすぐに体勢を直し、剣をふりかぶる。

しばらく打ち合いが続いた。

「そろそろラディンがボロを出すな」

直情的なラディンは打ち合いが続くと一点に集中してしまい、ししば大極を見失う。本人も分かっているので、普通は先手必勝、すばやく相手の急所を突いて勝負をつける。タリクはその逆だ。じっくり相手の動きを見極め、疲れた頃合を見計らって仕掛けていく。だから、タリクから攻撃を仕掛けるのは珍しいのだが、結局はいつものパターンに持ち込んだらしい。持久戦になるとラディンの負けだ。

そう、誰もが予想していたとき。

「あ」

タリクの剣が飛んだ。

止めの刃をラディンが振り下ろす。タリクは盾も放り出して転ぶように脇へ退け、ラディンの足を引っ掛けた。

「わっ！」

ラディンが避け損ねてたたらを踏む。かろうじて転倒だけは免れて振り返るも、そのときすでにタリクの拳が迫っている。それを、ラディンはとっさに両腕を交差させ、受け止めた。

「今日はねばるな」

タリクがニヤリと笑う。その余裕有りげな様子が憎らしい。ラディンはギリッと唇をかみ、渾身の力を込めて彼の拳を押し返した。

「剣の勝負だと言ったくせに、殴り合いに持ち込むのは卑怯だぞ！」
ラディンが叫ぶと、タリクは吹き出した。

「お前、戦場でそれは命取りだぞ。剣など、2人も殺せば血脂で使

い物にならん」

「ここは戦場じゃない！」

「だから甘い。ペルージャだけがいつまでも平和だと思うな」

「なっ!？」

タリクのその発言に、周囲でざわめきが始まる。

「いきなり何を言い出すかと思えば……」

誰かが鼻で笑えば、タリクはそちらを横目に見て哀れむようにため息をついた。

「確かに。平和なのはペルージャだけですな」

そのとき、輪の外からクスクスと笑う声が割って入った。自然と輪が割れ、道が出る。

サズを背に担いだ青年がそこに立っていた。

「誰だ？」

「失礼しました。流れのサズ弾き、カリームと申します」

彼は自己紹介すると、ゆっくりと周囲の顔を見回した。

「言いたくはないですけどね。砂漠の内はすべて戦場です。そして、戦火はまもなくこの国にも達するでしょう。今の内、その御仁から戦場での戦い方を学ばれたほうがよいと思いますよ」

「なんだと……」

周囲の齒軋りも聞こえてきそうな緊張など気にせず、カリームは輪の中に入ってきた。2人の前に立ち、タリクを見て、ふと首をかしげる。

「あなたは……」

「？」

「あ、こんなところにいた！」

そのとき、兵士が1人、こちらに駆けて来た。

「そのサズ弾き、陛下がお待ちだ！」

「あ、そうだった。まだご挨拶もしてませんでした」

「というか、勝手に城内をうろつくんじゃない！」

「すいません」

まるで悪びれもせずに笑う青年を見て、誰もがガツクリと肩を落とした。

カリームが去る。その後ろ姿を見送って、ラディンがポツリと告げた。

「あいつ、お前に何か言いたそうだったな」

「ああ」

「もしかして、お前のこと知ってるんじゃないか？」

「どうだろうな」

「聞いてみるよ。何か手がかりぐらいはつかめるかもしれないぞ」

「また会うことがあればな」

「ぬるい！ 自分のことだろ、知りたくないのか？」

ラディンが彼の襟元を掴んで揺する。タリクはニツと口角の端を上げた。

「心配してくれてるのか？」

「だ……誰がっ！」

ラディンはあわてて彼を放すと、間合いを取った。

「さっさと自分のことを思い出して、出て行ってほしいだけだ！」

捨てゼリフを残し、道具を持って駆け去った。

夜の帳が下りるころ、華やかな灯りが後宮の一角に灯った。

「あら、中々綺麗な顔をしてるわね」

カリカ・ラキアがほほ笑みかけると、カリームはふわりと笑った。湯浴みし、身支度を整えたカリームは確かに女性受けする端正な顔立ちをしていた。柔らかに波打つ金茶の髪と琥珀色の瞳、何より浅黒い肌が珍しく、女たちは興味津々で彼を見つめている。

浅黒い肌は南のジュート族に多い。

「確かに、彼ならアユラも気に入るでしょう。さすがはお兄様です。こと。好みをよく分かっていらつしやるわ」

「茶化すな」

セイラムは軽く口を尖らせ、横を向いた。

女官たちがそれぞれに酒や前菜の盆を持ち、始まりの合図を待っている。一応今宵の宴はアユラが主役なので、彼女が来るまで始められないのだが

「何か奏でておりましようか？」

どこか居心地の悪い空気をなごまそうと、カリームが声をかける。セイラムがフウとため息をついた。

「しかたない、先に始めるか」

セイラムの合図で、女官たちが酒を注いで回る。

「では、アユラの成人を祝って」

「おめでとうございます、陛下」

本人がいないのでどこか締まりのない乾杯となるも、それを合図にカリームはサズを奏で出した。

2曲弾いたところで、カリームは一旦手を止めた。アユラの来る気配はまだなく、宴もなんだか白けた空気が漂い始めている。

そのときになって、ようやく入り口に人影が立った。

「やっと来たか」

「お待たせしてすいません」

アユラはその場に膝をつき、頭を下げた。セイラムが許す旨告げると、アユラは顔を上げ、中へ入った。

髪は頭の中ほどで1つにまとめ、鮮やかな青石の櫛で留めている。うつすらと化粧も施して、大人の装いだ。体格こそまだ幼さが残るものの、もはや子供とは言えない1人の娘がそこにいる。

なるほど、と、カリームは心の中でつぶやいた。これは確かに美しい姫だ。政略だけで娶ろうと企む諸国の王達も、その目で実際に見れば、彼女自身を欲するだろう。

「では、今一度」

セイラムが杯を取ると、皆それに習う。

「アユラの成人を祝い、乾杯」

「乾杯」

アユラも杯を合わせて一口すすると、すぐにその場に置いて立ち上がった。

「遅れたお詫びに、舞わせていただきます」

「なら、せっかくだ。カリームのサズで舞ってみるか？」

セイラムが提案する。アユラはそのとき初めて気付いたとばかりにカリームを見た。

「何ができる？」

「マゼラスで幾つか、お国の歌曲を仕入れてきました。それでよろしければ」

「なら、1つ頼む」

「かしこまりました」

カリームが頭を下げると、アユラはごく淡い笑みを浮かべた。いつもとは違う妙に大人びた微笑に、周囲の者が一瞬息を呑む。

サズの奏で出した旋律は、賑やかではないものの、明るい柔らかな調べだった。アユラはふわりと手をかざし、その調べに合わせて舞いだした。

しつとりと落ち着いた、美しい舞だ。誰からともなく吐息がもれる。

だが

「にゃーっっ！」

ふいに、間の抜けた雄叫びを上げてアユラが手を止めた。

「アユラ？」

セイラムがいぶかしむように声をかける。他の者は呆氣にとられて固まったままだ。

アユラは肩で大きく息をつきながら、まっすぐ挑むように兄を見つめた。

「やつぱり、こんなのは私じゃないっ！」

「は？」

「兄上、お願いです。いざというときはちゃんと王家の女にふさわしく振る舞いますから、普段は今までどおりの私でいることを許してください！」

その場にひざまずき、頭を垂れる。

「ずっとこんなふうでいるなんて耐えられません。体は大人になったのかもしれませんが、私は私です。昨日までと同じアユラです。だから、これから私は外へ出て、皆と交じりたいのです。兄上、どうか！」

「陛下、私からもお願いします。アユラを今までどおり扱ってやってください」

カリカ・ラキアもアユラの援護に回る。セイラムは2人を見比べ、フウとため息をついた。

「誰が、それを禁じると言った？」

「え？」

アユラが顔を上げ、目をしばたく。

「いつ、私がお前に後宮でおとなしくしているなどと命じた？」

「でも……大人の女はそうするものだ、皆が……」

「確かにそうだし、そうしてくれるなら私も心安らかでいられるん

だが、はなからお前にはそのようなこと期待していない」

諦めるような口調。だが、そこには隠しようのない愛情が込められている。

「今までどおり、好きにするがいい。アユラ、お前は王宮ではなく、このペルージャの花なのだ。城の者だけでなく、民からも愛でられて、これから尚一層美しく咲くがいい」

「ありがとうございます！」

その瞬間のアユラの笑顔

カリームは目を見張った。なんと生き生きとした美しい花なのだろう。輝きが違う。強さが違う。先ほどのしおらしい姿よりよほど魅力的だ。

これがこの娘の本当の姿なのだと、カリームは瞬時に察した。

「カリーム！」

「は……はい！？」

ふいに名指しされ、カリームは間拔けた面でアユラを見返した。それがよほどおもしろかったのか、アユラが大きな口をあけて笑う。「もっと賑やかな曲にしろ。さっきのは辛気臭い」

「え？ でも、あの……」

「ラーシャ、来い！」

カリームがおろおろしている間に、アユラは戸口に向かって声を張り上げている。すぐにパタパタと駆けてくる音がして、ラーシャが飛び込んできた。

「姫さま、やったー！」

そのままの勢いでアユラに抱きつく。アユラはそれを笑って受け止め、よしよしと頭を撫でた。

「カリーム、何ボカンとしてる？」

「え？ あー……では、港ではやりの小唄など」

「それだとラーシャが歌えない。城下のものにしろ」

「姫さま、大丈夫です。適当に合わせますから」

「さすが、ラーシャだ」

アユラが誉めると、ラーシャは勝ち誇ったようにカリームを見て笑う。カリームの顔が引きつった。

「早く始める。兄上も義姉上も待ちくたびれておられる」

「はい……」

カリームは小さくため息をついて、サズを抱えなおした。

城中でも祝い酒が振る舞われた。

「姫もついに成人なされたか……」

ラディンがボソと告げる。

「えらく落ち込んでるな」

その様子を見て、タリクが笑った。

「べ、べつに！ めでたい話だし、なにより、これで城出されることもなくなるのだから、私の肩の荷も降りる」

「近衛の務めに専念するか」

「そうだ」

「では、聞こう。もし戦火に巻き込まれたら、誰を守る？」

「お前はどっしていちいち話を広げるんだ？」

「もしもの話だ」

タリクの声音に真剣なものを感じて、ラディンは返答に詰まった。タリクが暗示でもかけるように告げる。

「守るのは国王でなくてもいい」

「え？」

「アユラでもいいんだ。王家の血を引く者が1人でも生き残れば旗印となる。いざとなれば己の心を優先しろ。より守りたいほうを守れ。忠義や筋道など考えていては板ばさみになるだけで、結局どちらも失うぞ」

「お前……」

「忠告はした。あとは、いつそのときが来てもいいように、ちゃんと心の準備をしておけ。それが、お前のためだ」

タリクの黒い目がまっすぐにラディンを見据える。ラディンもま

た、まばたきを忘れたようにジッと見つめ返す。

そのとき、後宮でドツと歓声が上がった。2人とも弾かれたように我に返る。

「な……なんだ？」

「アユラがまた何かやらかしたかな」

「姫は成人なさったんだぞ！　いつまでもそんな子供みたいな……」
「たった1日で、人間はそんなに変われないぞ」

「そ、それはそうだが……でも、そういう言い方はないだろう！」

「怒るな。俺はバカにした覚えはない」

「当たり前だ！　そんなことをすればただではすまん！」

「分かった、分かった」

タリクが笑いながら酒を注ぎ足す。それを、ラディンは一気に飲み干した。

「そんな飲み方したら、悪酔いするぞ？」

「うるさい！　飲ませてるのはどっちだ！」

言いながら、また杯を差し出す。どうやら、今夜は自棄酒らしい。面倒なことになってきたぞ……と、タリクは心の中でため息をついた。

そんなこんなで、さらに何杯か勢いよくあおった挙句、ラディンはその場にゴロンと転がった。

「やっぱり……」

タリクがフウとため息をつく。

「ラディン、おい、起きろ」

「んー……」

肩を揺すってみる。ラディンがうるさそうにその手を払う。

「ひめえ……」

「面倒な奴」

タリクは苦笑すると、むずがるラディンを背に負ぶって自分の部屋へ連れていった。

翌朝、ラディンはタリクの腕の中で目を覚ました。

「あ？」

一瞬己の置かれた状況が分からず、ラディンはしげしげとタリクを見つめる。

むき出しの肩に程よくついた筋肉、そして鎖骨のくぼみ……と順に視線を移し、つまり裸なのだと認識する。一応、下は穿いているようだ。

そして、己もまた……。

「うわーっ！？」

その瞬間、ラディンは悲鳴を上げて飛び起きた。

「うるさいぞ」

その声でタリクも目を覚ます。

「な、なななんでお前がここに！？　というか、どうしてこんなことになってるんだ！？」

「ああ……」

タリクはポリポリと頭をかくと、ニヤリと笑った。

「昨夜は楽しませてもらったぞ」

「なっっ」

ラディンが固まったので、タリクはその体をそつと抱き寄せ、顎を掴む。

「中々可愛い声で泣いてくれた」

言いながら、顔を近づける。

そのとき

「タリク、ラディン来てないか？」

ふいに扉が開いて、アユラが顔を覗かせた。

「あ……」

双方共に固まる。

次の瞬間、ボタンと扉が閉まり、足音が遠ざかっていった。

「違っんです、姫え！」

後宮に続く中庭で、ラディンが涙ながらに訴える。その目線の先に、背中を向けたアユラがいる。

「みごとに引つかかったな」

ラディンの斜め後ろで、タリクがニヤニヤと笑っている。

「黙れ！ よくもあんな不埒なマネを！」

「飲み潰れるからだ」

「だからって、部屋に連れ込んで服脱がせるか！？ それでよくお前はグースカ熟睡できたな！」

「俺は抱き枕がないと眠れないんでな」

「ウソつけ！」

ラディンは顔を真っ赤にして彼になぐりかかった。

アユラが顔だけ振り向ける。

「べつに、お前たちがどういう関係だろうと、私は気にしないが」

「

「だから、誤解なんですってばー！」

「女官たちに良い娯楽を与えてくれてありがとう」

「あつー！」

木陰で後宮書記官ナリが聞き耳を立てている。ラディンは「しまった」と青くなつたが、もはや後の祭り。

ナリはニヤリと笑うと、室内に駆け戻っていった。これで、今晚あたり妖しげな話が後宮に出来ることだろう。

ラディンの意識がフツと遠のく。

「あ、死んだ」

「本当にからかい甲斐のある奴だ」

タリクがクツと笑う。アユラがさすがに疑いの目を向ける。

「で、実際のところどうなんだ？ 何かあったのか、それともなかったのか？」

「なかった」

「そうか」

アユラがホツとため息をつく。それからラディンに近づき、その体を揺すった。

ラディンが我に返る。

「ひ、姫！ 誤解なんです！」

「分かった、分かった。その話はもういいから、そろそろ行くぞ」

「は？ どこへ？」

「市に決まってる！」

言うが早いか、身を返す。

「な……姫、成人なさったのに、何故外へ！？」

「兄上が許してくださったのだ！ 今までどおり好きにしていって！」

「陛下、なんてことをーっ」

ラディンがあわててその後を追っていった。

「本当に自由なお姫様だ」

タリクは笑いながら2人を見送った。それから、いつものようにその場に寝転がる。

そこへ、カリームがやってきた。

「なんだ？」

じつと己を見つめてくる青年に、タリクが声をかける。

「昨日も俺を見て首をかしげていたな？ 何か気になるか？」

「ええ、見たことのある方だと思ったので」

「ほお？」

タリクは身を起こすと、興味深げにカリームを見つめた。

「でも、本当にその方だとすると、こんなところにいるはずがない。だから、別人だと思うんですが……」

「他人の空似ではすまされなくらい似ている、と？」

「はい」

「では、言ってみる。もしかすると、本当にそうかもしれないぞ」

「からかつてるんですか？」

「いや」

「だって、もし当人なら、私に分かるはずですよ。あなたは私のこと知らないんでしょう？」

「だって別人ですと、カリームが告げる。タリクはフウとため息をついた。」

「俺にはここへ来る前の記憶がない」

「は？」

「過去のことは何一つ分らないんだ。仮にお前とどこかで出会っていたんだとしても、今の俺は知らない」

「そうなんですか……」

「だから、もし知ってるなら教えてほしい。俺は何者だ？」

「どうやらからかっているわけではなさそうだとカリームが察する。」

「もし、本当に私の知っている方だとするなら、あなたは」

「カリームが口を開きかけたそのとき。」

「タリク、大変だ！」

「アユラとラディンが血相変えて駆け戻ってきた。」

「バスの使者だ？」

「侍従の報告を聞き、セイラムが眉をひそめた。」

「使者の白旗と国旗を掲げております。王からの正式な使いであることは疑いようもなく……」

「では、会わずに帰すわけにはいかな」

「謁見の間に通すよう指示し、セイラムは仕度のために一旦私室へと下がった。」

「使者の白旗ともう一つ、国旗をなびかせた一団が王宮の前庭を埋

めている。

国旗に描かれているのは、三頭一身の竜が護る1本の杖。三頭とはシン、ハン、ツイの古族^{イエウ}を指し、杖は権力の象徴だ。すなわち、我こそは古族の後を継ぎ、世界を支配する者であると謳っている。前庭をのぞめる回廊に来て、アユラはラディンたちと共にその光景を見つめていた。

「確かにバスラです」

カリームの検分に、アユラは「やっぱり」と唇をかんだ。

「一体、何をしに？」

「白旗を掲げているので、宣戦布告はないですね」

「では、何かの交渉か？」

「まあ、そういうことになるかと」

「よし」

アユラが身を返したので、ラディンはあわててその腕を捕まえた。

「ダメです！」

「まだ何も言っていないぞ！」

「謁見を覗き見しようと言っくんでしょう？ 絶対ダメです」

「う……」

凶星だったので、アユラは固まった。ラディンがフウとため息をつく。

「でも、お気持ちは察しますよ。だから、私が見てまいります」

「え？」

「俺も行く。ラディン、近衛の服を貸してくれ」

「ああ」

「ラディン、タリク」

「姫、ここは我々に任せて、部屋でお待ちになってください。必ず、お伝えしにまいりますから」

「わかった」

ラディンの真剣なまなざしを受けて、アユラはうなずいた。すぐに身を返し、後宮に戻っていく。

「私も同席していいですか？」

カリームが尋ねる。ラディンは好きにしろ、と返した。

「あなたは客人だ。陛下が自由に歩くことをお許しなされたのなら、私に止める権利はない」

「じゃあ、先に行つてます」

「ああ。タリク、来い」

ラディンはタリクを促し、まずは兵舎に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2586/>

ペルージャの青い華

2011年12月10日19時54分発行